

大学院生の研究

博士後期課程 3 年次 小山田 真帆

古代ギリシア史を専攻しています。特に民主政期のアテナイを対象に、ジェンダー・セクシュアリティをテーマとする研究に取り組んでおり、現在は男性間性愛と政治活動について考察しています。『古代ギリシアの同性愛』（原著 1978）を著したケネス・ドーヴァーは、ギリシアの男性間性愛を観察するうえで、能動的役割を担う側をエラステース、受動的役割を担う側をエローメノスと呼び、性的関係における能動-受動関係を社会における支配-従属関係の相似形とみなしました。性的関係の受動側を務めることは相手への従属を示したため、エローメノスとなる自由人や市民の少年が将来の指導的立場に相応しい名誉を失うことがないように、男性間性愛の実践には複雑なプロトコルが存在したとするドーヴァーの見解は現在も一定の説得力をもって受け容れられています。前5-4世紀のアテナイの史料からは、かつてエローメノスとして同性と性的関係にあった男性が、後にポリスの指導的立場に立ち、政治闘争の場で過去の性的経験を揶揄・非難される事例が複数確認できます。ドーヴァーらの見解に従うならば、特にエローメノスの立場は男性市民の支配的地位に必要な資質を不安定な状態にさらしかねないものでした。しかし同時に、有力な政治家と親密な繋がりを持つことは、野心的な若い市民にとって政治的技術や人脈を培う絶好の機会でもありました。私の研究では、史料中でエローメノスと名指される人物たちの経歴に注目することで、アテナイの男性市民が抱えていたこうしたジレンマがポリスの実際の政治の中でいかに作用していたのかを明らかにしたいと考えています。

博士後期課程 3 年次 中辻 柚珠

主に英語圏の研究で近年よく言及されるナショナリズムの「波」の側面に関心を持っており、ナショナリズムはどのような条件下で急進化し、どのような状況において失敗するのか知りたいという問題意識から、プラハの芸術界に焦点を当てて研究を進めています。方法論として、タラ・ザラのナショナル・インディファレンス論の応用を試みています。

2021年度は、ようやく研究が前に進んだという一年でした。ずっと方法論の段階で右往左往してしまい、なかなか最初の論文を出せずにいましたが、どうにか『史林』104巻6号にて形にすることができました。従来のナショナル・インディファレンスに関する議論は、ナショナリストによるネイション／ナショナリズムへの「無関心」の駆逐の試みと、「無関心」と見える当事者の態度の両方を研究対象としており、概念の精緻化の点で課題を抱えていました。これに対し、私は当事者の無関心・曖昧さ・両義的態度を「距離」と呼んで区別しています。これにより、ナショナリストの目に「無関心」と映る態度の裏にある当事者の主体性をより浮き彫りにできると考えています。

以上の前提をもとに、『史林』には20世紀転換期のプラハ芸術界の事例を考察した論文を投稿し、現在は第一次大戦と建国の時代に焦点を移して研究を進めています。方法論は、議論の骨格に関わるので、問題が見つければ都度再考したいと思っていますが、現在のところ自分としてはかなり納得できるレベルに持っていかれたと思っています。最初の論文を出すまでにごく時間がかかってしまい、焦ることも多々ありましたが、結果的に意味のある回り道だったのかなと思っています。

この時勢下ですが、2021年6月までプラハにお

り、史料を概ね集められたので、2022年度はとにかく一次史料を読み進める一年としたいです。年度中に次の論文を投稿するのが目標です。

博士後期課程3年次 吉田 瞳

中世後期ドイツ史を専攻しています。前号では、①本目の論文が公刊されること、②博士後期課程での研究テーマを変更したこと、③21年9月に再度渡独したいと思っていること、を記しました。本号でもその経過報告から始めます。

まず、①について。日本サウンドスケープ協会の機関紙に、拙稿「[中世後期ドイツ都市における管楽器の社会的機能——ニュルンベルクの事例を中心に](#)」が掲載されました。修士論文の一部を論文文化したものになります。もし宜しければご覧ください。

②の研究テーマについては、結局もとの「管楽器」ないし「音と都市秩序」に回帰しそうです。新テーマとなったはずの「侮辱」の研究を進めるなかで、管楽器の話を展開する糸口を見つけてしまったわけです。もちろん侮辱の論文もそのうち書きたいと思っています。

最後に③について、21年度の留学／研究滞在は、オミクロン株の流行によって潰えました。この世にはポケモンばりに進化する生物がいるのですね。22年度はせめて史料調査に行きたいと考えていますが、コロナにくわえヨーロッパ情勢も読めない今、もしかするとこちらも諦めるかもしれません。

上記以外の21年度の成果としては、諸々のアウトリーチ活動があります。目新しいものを挙げると、自分で企画したり人から呼ばれたり経緯はさまざまですが、4本ほど配信コンテンツに出演しました。また、22年3月にリリースされた「研究者のための研究発信テキストプラットフォーム Cunugi」にも参加しています。こちらはアカデミ

ア版noteとでも呼べるサービスで、私もうっすら参加しています。例年通りこの4月には大阪初期新高ドイツ語研究会の成果物も公刊されました。

21年度は留学できないストレスから、自分がやりたいことを片っ端からやりました。22年度も自分が満足できるまで、動きまわりたいと思います。あと、いいかげん論文を形にしたいです。

博士後期課程2年次 石原 香

フランス革命史を専門にしています。フランス革命期における革命・共和主義の定着のプロセスと人びとの感情との関わりについて、南仏トゥールーズにおける公教育の事例から研究しています。公教育と聞くと学校教育が想起されがちですが、革命当時はそれにとどまらず、祭典や演劇も含まれていました。そこで、これまで私は祭典、とくに総裁政府期(1795-99年)の国民祭典に注目することで、祭典組織に個人あるいは集団の感情(憎みや恐ろしい、嬉しいなど)がどのように表出されていたかを検討してきました。そして博士後期課程1年次の終わりごろからは、新たな公教育の現場として、劇場に焦点を当てることにしました。

革命期トゥールーズの劇場を調べていくなかで、デバローHyacinthe Pellet-Desbarreaux(1756-1828年)という興味深い人物に出会いました。デバローの名前は祭典史料のなかに度々登場します。総裁政府期において、彼は同市の為政者として、都市行政官、次いで都市行政長(最終的にはオート＝ガロンヌ県中央行政官)に就き、国民祭典の組織では中心的な役割を果たしたからです。そんな彼ですが、役者や劇場支配人としての一面も持っていました。彼は移動型の劇団で旅を続け、1786年にトゥールーズに移り住んでからは、コメディイ『トゥールーズのモリエール』の作成や同市の劇場の支配人に就任するなど、演劇界において頭角を現したのです。

都市行政と劇場の両方に携わるデバローは、確固たる共和主義者として、劇場による市民教育にも尽力しました。市の劇場での愛国的な劇の上演や愛国的な戯曲の売買、他の劇作家が書いた戯曲の校正と他都市への売却などです。今年度は以上の点に注目し、劇場空間においてデバローがいかなる感情を共和主義に相応しい／相応しくないとみなしていたか、彼の考えは他の為政者または市民にも当てはまるのか、といった問いについて、トゥールーズ行政の議事録や劇場関連史料などから考察していきたいです。

博士後期課程 2 年次 大野 普希

古代史ギリシア・ローマ史を専攻しており、特にローマ帝国下におけるギリシア人の歴史認識について研究しています。ローマ支配期のギリシア文化の特色は、その尚古主義的な傾向にあると言われます。ヘロドトスやトゥキュディデスにはじまるギリシアの歴史叙述は同時代史としての性格が強いものでしたが、ローマ支配下のギリシアでは、同時代のギリシア史を主題とした作品はほとんど書かれませんでした。ギリシアについて語られる時は、専ら古い時代の歴史が問題となったのです。これはしかし、ローマ帝国下のギリシア人が、同時代の状況から目をそらして過去に現実逃避をしたことを意味するわけではありません。支配者であるローマ人自身がギリシアの歴史・文化に強い関心を持っていたこともあり、ギリシア人の過去についての語りには現在の利害が強く反映されています。S. Swain が明らかにしたように、過去を語ることを通して、間接的にローマ支配に対する反発を表明する著述家もありました。

私の研究しているパウサニアスという人物は、ローマ帝政前期（後 2 世紀）に『ギリシア案内記』という著作を著し、ギリシア本土のほぼ全域にわたって、個々の都市の名所・旧跡とそれらに纏わ

る歴史や神話を蒐集・整理しました。そこには、今日では散逸してしまったものも含め多数の歴史家の見解や、地域ごとの口伝が豊富に記録されています。中でも『案内記』第 7 巻の冒頭にある歴史叙述は、ギリシアがローマの支配下に置かれることとなった経緯を詳しく語っており、パウサニアス自身のもも含め、ローマ帝政期のギリシア人が、ローマ支配の現状についてどのような考えを持っていたのかを教えてくれる極めて重要な箇所です。パウサニアスの記述の背景にある諸史料を一つ一つひも解いていくことで、歴史認識に反映された、帝政期のギリシア人のローマ帝国観を明らかにすることが今後の目標です。

博士後期課程 2 年次 岡本 幹生

オクタウィアヌスは、前 31 年のアクティウムの海戦でアントニウスとクレオパトラの連合軍を破ったことで、約 1 世紀断続的に続いた内乱を終息させました。その後の前 27 年に、オクタウィアヌスは元老院からアウグストゥスの尊称を授与され、属州統治を元老院と二分することになった点に、一般的に帝政成立の画期が設定されています。すなわち、前 27 年にローマにおいて共和政は終わりを迎え、新たに帝政が開始されたと考えられているのです。

しかし、近年では、共和政期と帝政期という時代区分を過度に強調することで、時代の連続的な側面が見えなくなるという批判や、共和政期から帝政期への移行はもっと段階的なものだったという批判が行われる一方、それに対し、両時代の断絶はやはり極めて大きいということを改めて強調する立場から再反論も展開されている状況です。こうした研究状況のなかで必要となってくるのは、ジャック・ル＝ゴフが言うような「連続性と不連続性を組み合わせ」、「長期持続と時代区分を結びつける」（菅沼潤訳『時代区分は本当に必要か？

——連続性と不連続性を再考する——』藤原書店、2016年、185頁）ような視点であるように思われます。

そこで、記憶という観点が有用なのではないでしょうか。記憶は、別のメディアで語られる過去を単に再生産したものではなく、むしろさまざまなメディアを通じて知られている過去の事象やその解釈のなかから一部を現在の観点で選択し、ときにそれに修正を加えることで、過去を再構築したものです。こうした視点で史料を見直し、史料が書かれた当時（＝現在）とは異なるものとして現在と分節される過去（の事象や価値観）や、現在の範例として用いられる過去をみていくことで、共和政期と帝政期の連続的な側面と不連続な側面を析出し、両時代の関係を捉え直していこうと考えています。

博士後期課程 2 年次 林 祐一郎

世界史上最も流通したと言われる本の中に、このような文言があります。「あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出さない。彼らの生涯の終わりをしっかり見て、その信仰を見倣いなさい」（新共同訳『新約聖書』「ヘブライ人への手紙」第13章第7節、1987年）。私が研究してきたドイツ・ユグノー協会の初代会長、アンリ・トラン Henri Tollin (1833-1902) という人物は、近代的な史料調査環境が構築される中、こうした宗教的信念に従って、フランス系の信仰難民である祖先たちの歴史を考究・叙述していました。

排他思想としてのナショナリズムが検討対象となり、解放思想としてのグローバリズムが投影されがちな、今日の近代史研究。当然、トランもナショナリズムと無関係ではありませんでしたが、過去を記述するという人間的な営為の背景には、もっと様々な動機が働いているはずで、その一部を占めるものが、内面の宗教的信仰だったり、

教会政治的な思惑だったりするのでしょうか。これらに、ナショナリズムとはまた違う、それでいて必ずしも国民や君主への恭順と矛盾しない、諸地方への郷土愛 Patriotismus を加えても良いでしょう。

ドイツ・ユグノー協会の初代副会長としてトランを支えたのは、リヒャルト・ベランギュイエ Richard Béringuier (1854-1916) という在野の系譜学者でした。彼もトランと同様にフランス系信仰難民の末裔でしたが、ベルリン歴史協会という郷土史研究組織の代表としても知られます。19世紀から20世紀へと転換する頃のドイツ帝国で、「郷土愛の夢 Patriotische Phantasien」を追った人々が如何なる思想背景や知的基盤を持ち、彼らが大学で教授される国民史や教会史と如何なる関係にあったのか。これこそ、私が今最も知りたいことです。

博士後期課程 1 年次 神津 智史

私はドイツ騎士修道会の使節派遣と書簡コミュニケーションを研究対象にしております。ドイツ騎士修道会は13世紀から16世紀にわたってヨーロッパ中に広がる所領群を統治していました。その支配領域は、様々な特徴を持った地方・地域の複合体であり、14世紀に最高責任者である総長がプロイセン地方のマリエンブルクを本拠地に据えて以降、当地方がドイツ騎士修道会の中心としての重要性を一層増していきました。そして、この総長のお膝元から各地方・地域へと派遣される使節や送達される書簡は、ドイツ騎士修道会の広域統治のために重要な役割を果たしました。

修士論文では、ドイツ騎士修道会の文書の作成・運搬・保管のサイクルに関して総長尚書部の活動から考察し、また総長・総会の派遣する巡察使の活動についても考察を行いました。その結果、巡察使は総長・総会から委任された広範な権限のも

とドイツ騎士修道会内部の事案のみならず巡察対象地で生じた様々な問題に関して調査・裁定を行い、その内容は文書報告のみならず口頭報告により広く情報共有が行われたこと、さらに15世紀にドイツ騎士修道会の巡察制度の規格化・精緻化が著しく進捗したことが明らかとなりました。

今後は、巡察使以外の類型の使節（在教皇庁代理訴訟人や外交使節）の活動にまで視野を広げて分析を行うことによって、使節類型ごとに期待された役割について、その変化や特徴を明らかにしていこうと考えております。この時、文書の発給・授与の際や外交の場での象徴・儀礼的コミュニケーションの観点に加えて、政策決定、問題解決等の実務のためのコミュニケーションの観点から分析し、ドイツ騎士修道会の統治コミュニケーションの実態を解明することも目標にして研究を進めていきたいと思っております。

修士課程2年次 小雲 立也

私は古代ローマ宗教、特にローマ人の宗教的生活および宗教的認識に関心を抱いています。特に場所という観念に基づいてローマの宗教の研究を行っています。ローマ宗教はギリシアのような神話を持たない一方で、都市ローマの建国神話や神殿の建設の由来といった場所と結びついた神話というものが多いとみられ、「場所の神話」といった形容もされることがあります。卒論時に扱ったポメリウムと呼ばれる境界線もローマにおける宗教的な場所を定める役割を持つ存在です。現在、私は鳥ト官と呼ばれる役職を対象としています。

ローマにおける鳥ト官の役割は、正式な鳥トを行い、神の意思を受け取ることで彼らの行う諸々の活動に正当性を与えることにあります。その役割を果たす上でテンブルムと呼ばれる聖域を定め、そして保持し、統御することで場所の正当性を保障し、正当な鳥トを行うのです。ローマ人の土地

や空間の持つ正当性の概念が大きく働いている例となります。一方で、こうした正当性を生み出す行為は、ローマ人が神々を利用している行為と考えることも可能です。鳥ト官は彼ら自身で鳥トの現実感というものを創造し、人々が見出したどんな予兆をも実現するためにユピテルを縛り付けている様を見ることができるとは思います。暴論ではありますが、鳥の飛ぶ様に意味を見出し理由をつけることができれば、それすなわち神の意思の理解となるのです。

鳥ト官の研究は、従来の固定化された儀礼を受け継いでいくローマ宗教という枠組みの中で、宗教儀礼を通して自分たちの目的を果たそうとする人々の存在を見出すことができるものであると考えています。時に彼らの持つ正当性は政治的に利用され、鳥トはローマの外部ですら法の作成の根拠となることもあります。元々はローマ人が神に縋るための行為であった鳥トが共和制期にいかなる存在となったのか考えていこうと思っております。

修士課程2年次 川崎 紘子

中世のイベリア半島は、北部のキリスト教勢力と南部のイスラーム勢力が隣接し、戦闘、同盟、通商など多様な関係を通じて接触する場でした。どちらの勢力下にも他宗教の信者や改宗者が存在する場合があります、彼らが君主による保護の対象となったり、宮廷で重用されたりする事例もありました。そうした状況で、北部のキリスト教諸国ではイスラームをどのように認識し、表象していたのかについて関心を持っています。特に後ウマイヤ朝によるアンダルスの政治的統一が崩れ、軍事的優位がキリスト教諸国に移っていく11世紀に注目しています。

イベリア半島におけるキリスト教とイスラームの関係の評価は、スペインの発展を阻害したとみなす否定的なものから融和的な「共存」や文化交

流を主張する積極的なものへと変化してきました。しかし近年、この「共存」概念は敵対関係なども含んだ広義のものとして慎重に捉え直されています。

11世紀頃のキリスト教徒によるイスラームについての記述には、長い伝統に則った型にはまった非難や誤解も多くあります。しかし例えばイスラームによるキリスト教徒迫害を描く聖人伝の中に、イスラームの制度を正確に踏まえた記述が登場することもあります。またキリスト教徒による年代記では、ムスリムの君主の勇敢さや誠実さを称える一方、敵対関係にあるキリスト教徒の支配者に対して、ムスリムに対して使うのと同じような「不信心者」といった悪罵を投げかけている例もあります。

実際の接触で正確な知識が得られることもあれば、接触を通じて信仰を脅かされる危機感も芽生えることがあります。イベリア半島のキリスト教徒が、イスラームへの認識をどう形成していったのかについて、迫っていければと思います。

修士課程 2 年次 中山 真由香

19世紀アウスグライヒ体制下のオーストリアが描く、ハプスブルク帝国という空間理解を、当時のドイツ語圏地理学を合わせ鏡としながら、分析しています。前世紀転換期のハプスブルク帝国像を巡っては、帝国崩壊後の新生諸国家を考えるにあたり、帝国と帝国内諸ネーションとの関係が注目されています。その関心の性質上、帝国内で働いた諸力を分析する傾向が根強いので、帝国外にまで浸透した情報を用いた上で帝国像を分析する課題は残されています。この課題に取り組む上で、私は地理学を取り上げることにしました。

近代地理学は、フンボルトやリッターに代表される著名な地理学者がドイツ語圏から輩出されており、19世紀は近代地理学が整備される時期に当

たります。大学では地理学教室の設置が広く見られる一方、その背景には国民教育を深化させるための科目「地理」が学校教育に導入されるための教師養成の側面も持ち合わせていました。

さて、オーストリア地理学は、しばしば「ドイツ語圏」地理学の一派として紹介されてきています。しかしながら、普墺戦争で政治的に袂を分かつことを考えると、オーストリア地理学を「ドイツと同質的な発展を遂げた」と等閑視するには、疑問の余地があります。とりわけ、教育科目としての「地理」に重点を置けば、尚更オーストリア地理学の特徴及びオーストリアによるハプスブルク帝国解釈が提示されていたと考えられます。

そこで、私はウィーンで出版された学校用の地理学雑誌を用いて研究を進めています。この雑誌は、ハプスブルク帝国に限らず同時代のドイツ語圏の教育学及び地理学から参照・投稿されていました。同雑誌は帝国内部向けであるとともに、帝国外のドイツ語圏の学術界に対しても開かれていました。こうした特性を持つ史料を活用しながら、同時代におけるハプスブルク帝国像の新たな側面を明らかにしたいと考えています。

修士課程 2 年次 新田 さな子

16世紀イングランドのテューダー朝、特に、エドワード6世と、メアリ1世時代の政治文化に関心があります。テューダー朝は、宗教改革をはじめ大きな変化が注目される傾向にあります。しかし私は、そのような多数の変化を経験し、時には大きな反発を伴いながらも、内乱や革命に発展させずに堪え得た王権運営のメカニズム、つまり政治文化を明らかにしたいと思っています。

従来の研究では、宗教改革を始めたヘンリ8世と、それを確立し、強国スペインを追い返したエリザベス1世に挟まれ、エドワードとメアリの連続した治世は、能力不足の君主のもと、極端な宗

教政策を行った危機の時代とされてきました。また、エドワードは急進的なプロテスタント、メアリはカトリック復興と反対の方針をとったことから、両治世は通時的に論じられることはほとんどありませんでした。宗教ではなく政治文化を軸に両治世を分析し、再評価をはかりたいと思います。

将来的にはエドワード・メアリ治世を通時的に論じることを念頭に、修士論文ではエドワード治世の政治文化を扱う予定です。9歳で即位したエドワードを君主に戴く政権は、どのように王権を運営したのか、また、政治の実権を握る人物が途中で変わった際、それによって政権中枢と地方をつなぐ政治文化には変化が生じたのかを、平時と緊急時を通時的に、地方の例としてノーフォークを取り上げて明らかにしたいと思います。

また、昨年9月まで留学していたヨーク大学では、エドワード治世の1549年にノーフォークで起こった「ケットの反乱」を通して、当時の支配階級の服従観や秩序観を明らかにし、今年1月に無事MA学位を取得しました。京都大学に提出する修士論文では、その研究の過程で明らかになった、政府と反乱との関係や政府の対応を、緊急時の政治文化を考察する要素として位置づけることができると考えています。

修士課程1年次 新垣 春佳

私の研究対象の骨幹は近代ウィーンの都市社会です。東京外国語大学中国語学科に在学中、おりしも日墺友好150周年を記念してクリムトを筆頭とする様々な「世紀末ウィーン」に関する展覧会が開催されていました。そこで魅せられた結果、中国語学科ながらドイツ近現代史ゼミで近代ウィーンについて考えてゆくことに決めました。

卒業論文では、当時のウィーン・ブルジョワジー社会生活で重要とされていたカフェに焦点を当て、それをめぐる公共圏の展開について考察しま

した。ユルゲン・ハーバーマスは『公共性の構造転換』で、17世紀から18世紀間のイギリスのカフェに着目し、当時台頭しつつあったブルジョワジーが中心となった公共圏形成について論じました。本書では、当時のカフェは現在のような喫茶が主目的の空間ではなく、旧来の宮廷社会政治に対抗し得る市民社会の言論空間として肝要な役割を担っていたと指摘されています。一方19世紀のウィーンのカフェについて、これまで主に同時代人の文学作品や文化史において市民社会の重要な一部分として語られてきたものの、公共圏の視点から多く論じられることはありませんでした。そこで卒業論文では、3月前期から19世紀末までの期間にウィーン・カフェの公共圏としての性質がどのように変遷してゆき、また当時の都市社会で重要なアクターであったユダヤ系ブルジョワジーがどのように関わっていたのかについて考えました。

修士課程では、近代ウィーンのもう一つの顔である大衆についても研究してゆきたいと思っております。とりわけ19世紀後半のウィーンではカール・ルエーガーに代表されるようなポピュリストが隆盛を誇り、そしてその支持基盤の多くが自由主義政治によって不利益を被っていた貧困層の大衆でした。異なる階層の人々の側からの考察を通して、多面的な近代ウィーン都市社会研究を構築してゆきたいです。

修士課程1年次 川内 康史

オーストリア＝ハンガリーにおけるポーランド系諸党の動向について研究しています。これら諸党の主たる拠点となったのは同国の「オーストリア」側を構成する領邦の一つ、ガリツィア＝ロドメリア王国（以降ガリツィアと略します）です。ガリツィアはその名こそ中世に由来しますが、地理的な単位としては他の領邦よりも新しく、ポー

ランド分割の結果ハプスブルク家の統治下に入った地域で構成されています。

さて、冒頭に申し上げた主題に取り組むにあたっては、(アウスグライヒ以前も含めた) ハプスブルク帝国の視点やポーランド政治史の視点から臨むことになります。ガリツィアという地域は帝国から見れば体制に協力的なポーランド系貴族の地盤、あるいは帝国内の「遅れた」地域であった一方、ポーランド系政治運動の側からすればドイツ領・ロシア領と比べ政党や結社(射撃団まで!)が活動しやすい地域、同化政策の警戒が要らない地域でした。この多面性は研究上のアプローチについても同様で、前者の場合は立憲制・選挙権などの制度的な観点や帝国全体の政局、帝国とナショナリズムの関係などが、後者の場合は大衆政党の台頭などが論点となりえます。

卒業論文では 1907 年帝国議会下院選挙の直前のポーランド農民党(人民党)機関誌の言説に注目しました。この選挙は同年に男子普通平等選挙が導入されてから初めて行われた選挙であり、制度上の転換点にあたるものでした。これに呼応するように投票率も大きく増加しており、民衆の政治化が進行した時期ともいえます。こうした時勢の下での民主的な政党政治の展開を伺い知るため、農奴解放以降を起源とする農民運動の系譜を継ぐ農民党の政治宣伝を取り上げました。その結果、反領主・反教権主義がその核を成していたこと、それを支えるためにナショナリズムを利用していたことを確認できました。他方、先行研究や歴史的前提の整理、制度面の理解などが今後の課題です。

修士課程 1 年次 竹下 美伊

私は戦間期(第一次世界大戦と第二次世界大戦の間)のフランス政治史、特に右翼やファシスト勢力の動向に関心があります。フランスといえば革

命の国、「自由・平等・博愛」の国というイメージが強いですが、現実には保守的な右翼勢力の伝統が根強く存在し、19 世紀末からはアクション・フランセーズなどの極右勢力も大きな影響力を持っていました。そして戦間期にはヨーロッパ各地で猛威をふるったファシズムの影響を免れ得ず、特に世界恐慌後にはフランス国内でファシズムの影響を受けた様々な人々が雑誌で執筆活動を行ったり、政党を作って政権掌握を目指したりしました。しかしこれらの活発な活動にも関わらず、フランスはナチス=ドイツによる外からの圧力に屈するまで、自らファシスト政権を選択することはありませんでした。なぜフランスの人々は最終的に自発的にファシズムを受け入れなかったのか。それが私自身の大きな問いでした。

卒論では 1936 年の人民戦線内閣成立から 1940 年の敗戦前夜の間を時期を中心に、当時の主要な極右・ファシスト組織の動向からそれらの運動がなぜ実を結ばなかったのを考察しました。最終的には、ファシズム諸団体が団結しなかったこと、議会制・共和制への信頼が完全に動揺するまでには至らなかったこと、ファシズム的主張が対独愛国主義の主張に転換したこと、人民戦線崩壊後の時期に選挙が行われずファシズム政党の合法的台頭の機会が失われたことなどの要因により、フランスにおけるファシズム勢力の政権奪取は果たされなかったと結論づけましたが、まだまだ掘り下げられるように思います。例えばなぜ多くの知識人がファシズムの思想に惹かれたのか、主権者たるフランス国民は極右・ファシズムの運動をどう捉えていたのか、などなど…

この 2 年間で、フランスにおけるファシズム運動をより多角的に描き出せればと思います。

修士課程 1 年次 坂野 水咲

私は古代ローマにおける食生活とアイデンティ

ティ形成の関心に興味を持っています。何を「食べない」のか、という選択を行うとき、とりわけその理由が所属する集団に帰属するとき、それはアイデンティティの発露であると言えるのではないかという考えのもと、卒業論文では共和政最盛期から帝政前期にかけて、ローマ人の食事規範が変化していく様子をエリート層の著作の中を探りました。特にガレノスのテキストを用いて牛肉の受容過程を検討しています。

食生活に関する研究は近年増加しており、交易路に着目した経済史的な観点からの研究、穀物供給の実態に注目した政治史的な研究、帝国の食習慣が辺境地域に流入・定着した度合い・過程を測る「ローマ化」に関連する研究など様々な視角から注目されています。その中で私は、食を通じてローマ人が帝国の拡大期に被支配地域から受けた影響に着目し、更にそれが「アイデンティティの変容」へと繋がった可能性を探りました。

私が検討したローマ人の変化は主に2つ。一つ目は共和政期におけるギリシアから流入した豪勢な食事スタイル、もう一つは西方の属州・辺境地帯の影響と思われる牛肉への忌避感のフェードアウトです。特に後者、ローマの肉食については、豚肉が中心であり牛肉を日常的に食べることは忌避していたと従来考えられていましたが、近年考古学史料の活用によって牛肉もローマ人の食生活において大きな役割を果たしていたことが指摘されています。そこで私は、帝国内のエリート(ただしギリシア人)であるガレノスが著作の中で、牛肉を特別忌避するものではなく豚肉と並置し、場合によっては食べると良いものとして言及していることから、認識の面でも牛肉への忌避感が薄れていたのではないかと考えました。

現在は食事の場が果たした機能に関心があり、特にローマの宴席と女性の関係に心惹かれています。

修士課程1年次 間野 夏未

私は十字軍史を研究対象としています。十字軍はかねてより歴史家の注目を集めてきた出来事であり、多様な角度から研究が行われていますが、私は特に十字軍に対する同時代の人々の認識を年代記などの史料を通じて探る事に強い関心を持っています。卒業論文では1095年に招集された歴史上最初の十字軍、所謂「第一回十字軍」に注目し、参加者の年代記の内容を比較検討する研究を行いました。

第一回十字軍招集当時、この軍事行動はこれまでの戦争とは異なる性質を持つ戦争、つまり現代の研究で言うところの「聖戦」として人々に受け取られました。イェルサレム占領という輝かしい成果もあり、第一回十字軍については多くの年代記にその事績が記されました。その中でも私は、十字軍の記憶を直接伝える史料として参加者の記した年代記に焦点を当てました。参加者による年代記は四つの作品が現代に残されており、十字軍が終了してから最も早くに書かれたであろうことから、他の年代記にも大きな影響を与えたと考えられています。

これらの年代記にはいずれも、参加者たちの聖墳墓に対する熱意や神による十字軍への援助などの宗教的な要素が豊富に記されています。しかし、すべての出来事が同じように描写されているわけではなく、書き手の立場によって描く内容は異なっています。特に、参加した諸侯についての描写は年代記によって違いが見られ、神が特定の諸侯に寵愛を与えるといったような他の年代記にはない記述が存在する事例もありました。個々の作者の価値観が作品に反映されていることも研究をする上で念頭に置いておかなければならない要素でした。

上記のように、卒業論文では十字軍参加者が記した年代記に注目してきました。しかし、十字軍

概念は参加者の体験を聞いた人々がそれを新たに書き記したことで更に発展していきました。こうした叙述史料の発展を辿ることが今後の研究の課題となると私は考えています。